

「助動詞—述語」結合と動詞（句）上昇

大 門 正 幸

0. 序

生成文法的接近法による標準的な分析においては、オランダ語、西フラマン語、ドイツ語（方言）などの西ゲルマン語には動詞（句）上昇と呼ばれる操作が存在すると仮定されている（cf. den Besten & Edmondson (1983)、Evers (1975)、Haegeman(1992)、Haegeman & Riemsdijk(1986)、Rutten(1991)）。この分析によれば、たとえばオランダ語の例(1)は、基底構造(2)から(3)に示すように動詞上昇によって派生されることになる。

- (1) dat hij het boek heeft kunnen lezen
 that he the book have can read
 'that he has been able to read the book'
 (den Besten & Edmondson (1983 : 158))
- (2) dat hij het boek lezen kunnen heeft
 that he the book read can has
- (3) a. lezen kunnen heeft
 └──────────┘
 b. kunnen-lezen heeft
 └──────────┘
 c. heeft-kunnen-lezen

Koster (1975) をはじめとする標準的な分析ではオランダ語の基底構造は SOV 型であり、¹ (2) では lezen 'read'、kunnen 'can'、heeft 'have' の 3 動詞が SOV 型に配列されている。その基底構造に動詞上昇が適用され、lezen 'read' (= (3

a)、lezen-kunnen ‘read-can’ (= (3 b)) が右方向に移動し、(1)の SVO 主要部先行) 型の語順が派生される。²

本稿では、助動詞と述語の結合を含む構文に関する資料をもとにして、オランダ語、西フラマン語、ドイツ語などと同じ西ゲルマン語に属する古英語にも動詞(句)上昇が存在したということを示す。1節では古英語における動詞(句)上昇の存在を主張する代表的研究である van Kemenade (1987) をとりあげ、その議論が不十分であり、したがって古英語における動詞(句)の存在が、まだ証明されていないことを示す。2節では古英語における動詞(句)上昇の存在を支持する経験的な証拠を提出する。3節は結語である。

1. 先行研究

本節では古英語において動詞(句)上昇が存在したと主張する van Kemenade (1987) の議論を検討する。本節の議論によって、van Kemenade の主張には多くの問題点があり、従って古英語における動詞(句)上昇の存在を示す根拠は確立されていないということを示す。

van Kemenade (1987) は、(4)、(5)の例はそれぞれ動詞上昇、動詞句上昇によって(6)、(7)のように派生されると仮定している。

(4) þæt he Saul ne dorste ofslean

that he Saul not dared murder

‘that he did not dare to murder Saul’

(CP, 199, 2/van Kemenade (1987 : 59))

(5) þæt hi mihton swa bealdlice Godes geleafan bodian

that he could so boldly God’s faith preach

‘that he could so boldly preach God’s faith’

(AHTH, I, 232/ibid.)

(6) ofslean dorste → dorste-ofslean

(7) [swa . . . bodian] mihton → mihton [swa . . . bodian]

古英語の標準的な分析においてはその基底構造は SOV 型であり、³ (6)、(7)

の派生はその分析に基づいている。van Kemenade (1987) の分析では(4)、(5)に含まれる法動詞の補部はSであり、動詞（句）上昇が適用されるとこのS節点が消失し、不定詞節が法動詞を主要部とする節と融合する、節融合（clause union）現象が生じる。動詞（句）上昇によってS節点が消失することを示す証拠として van Kemenade は次の2つの事実をあげている。⁴

第一に、(8)に示すように、法動詞の補部内からの接語（clitic）代名詞の抜きだしが可能である。

- (8) 7 wiste þæt hiene mon wolde mid þæm ilcan wrence
and knew that him man wanted with the same strategy
beþridian
overpower
'and knew that they wanted to overpower him with the same strategy'

(Oros, 155, 2/van Kemenade (1987 : 60))

(8)では裸不定詞 beþridian 'overpower' を主要部とする不定詞節内から代名詞 hiene 'him' が抜き出され、補文化詞 þæt 'that' に付加されている。van Kemenade (1987) によればSを越えての接語の抜きだしは不可能であるが、(8)において代名詞が抜き出されているという事実は、法動詞の補部がSとしての位置づけを消失している、すなわち動詞（句）上昇が生じていることを示している。

動詞（句）上昇の存在を示す第2の証拠として、van Kemenade (1987) があげているのは(9)のような例である。

- (9) a. þe we þa eardunge mid gearnian sceolon
that we the dwelling with earn must
'that we must earn the dwelling with'

(Ben, 4, 23/van Kemenade (1987 : 61))

- b. hwær hie landes hæfden þæt hie mehten an gewician
where they land had that they could on live
'where they had land that they might live on'

(Oros, 46, 15/ibid.)

(9 a)、(9 b)のいずれも関係節を含んだ例である。van Kemenade (1987) の主張によれば、(9)には wh 移動が関与している。もし不定詞補部が S としての位置づけを保持しているとすれば、その移動は概略(10)に示すように2つの S を越えることになり、下接の条件違反を引き起こす。

(10) [s' wh_i [s... [s... t_i...]]]

(9)が文法的であるという事実は、動詞(句)上昇によって不定詞補部がその S としての位置づけを消失していることを示している。

van Kemenade (1987) があげている上記の2つの議論はいずれも古英語における動詞(句)上昇の存在を示す論拠にはなりえない。上記の2つの証拠に共通する問題点として、そのいずれもが不定詞補部が S であるという仮定に依存している点があげられる。もし不定詞補部が Kato (1989) や Pintzuk (1991) が主張するように VP であれば、あるいは Kageyama (1992) や Tanaka (1994) が主張するように AGRP であれば、van Kemenade (1987) の主張は成立しなくなる。ここでは Kato (1989)、Pintzuk (1991) に従い、法動詞の不定詞補部は VP であると仮定する。この仮定に従えば、(8)における接語の抜き出しは S 節点を越えていないので動詞(句)上昇の有無にかかわらず適格であることになる。また(9)においてたとえ van Kemenade の主張するように wh 移動が関与していたとしても、介在する S 節点はひとつであり、したがって動詞(句)上昇の有無に関係なく当該の例は適格であると判断される。動詞(句)上昇という操作を許さない現代英語においても原型不定詞は障壁として機能しないという事実は、当該の範疇が S ではないという本稿の分析を支持する。

van Kemenade のあげる上記の2つの証拠には、その他にも次のような問題がある。まず接語の抜きだしに関してであるが、van Kemenade の主張に従えば、動詞(句)上昇が生じていない構文、すなわち基底の「不定詞—法動詞」という語順が保持されている構文においては、不定詞補部が S としての位置づけを保持しているために、(8)に見られたような接語の抜きだしは不可能であると予測される。しかしながら実際には、(11)のような例が存在する。

- (11) þ heo nan man syððan findon ne mihton
 that them no man afterwards find not could
 ‘so that no one could find them afterwards’

(ASC 11-24-418/Lester (1986 : 240))

(11)では、「不定詞—法助動詞」(findon-mihton)という基底語順が保たれているにもかかわらず、代名詞 heo ‘them’ が不定詞補部から抜き出され補文化詞 þæt ‘that’ に接語化されている。(11)のような例の存在は、接語代名詞の抜きだしが動詞（句）上昇の有無を示す証拠とはなりえないことを示している。⁵

関係節 (= (9)) に関しては、次のような問題点がある。古英語には(i) se 関係節、(ii) þe 関係節 (þæt 関係節を含む)、(iii) se þe 関係節の3種類があることはよく知られているが、van Kemenade があげている例は þe 関係節 (= (9 a)) および þæt 関係節 (= (9 b)) である。しかしながら Allen (1980) によって例証されているように se 関係節、se þe 関係節の場合とは異なり、þe 関係節、þæt 関係節の生成には移動は関与しない。移動が関与していないのであるから、下接の条件に基づいた van Kemenade (1987) の主張は受け入れることは出来ない。このように、van Kemenade (1987) があげている事実は古英語における動詞（句）上昇の存在を示す証拠として受け入れることはできない。

van Kemenade (1987) が動詞（句）上昇によって派生されると分析している(4)や(5)の例も、動詞（句）上昇を仮定することなく派生することが可能である。(5)の例は、(12)に示すように、動詞句外置によって派生することが可能である。

- (12) (5)の派生

[swa... bodian] mihton (動詞句外置) → t_i mihton [swa... bodian]_i
 同様に(4)の例は、(13)に示すように、動詞句外置とかきませ規則 (scrambling) を適用することによって派生することが可能である。

- (13) (4)の派生

[Saul ofslean] ne dorste (動詞句外置) → t_i ne dorste [Saul ofslean]_i
 (かきませ規則) → Saul_j t_i ne dorste [t_j ofslean]_i
 外置、かきませ規則のいずれも van Kemenade (1987)、Koopman (1991-1993)、

Pintzuk & Kroch (1985, 1989) などの先行研究で古英語においてその存在が主張されているものである。

以上本節では古英語における動詞（句）上昇の存在を主張する代表的研究である van Kemenade (1987) を取り上げ、古英語における動詞（句）上昇の存在はまだ証明されてはいないことを示した。

2. 「助動詞—述語」結合と動詞（句）上昇

本節では、助動詞と述語の結合を含む構文を分析し、古英語における動詞（句）上昇の存在を示す経験的な証拠を提出する。2.1 節では AP 構文と呼ばれる構文を、2.2 節では MAP 構文と呼ばれる構文を扱う。なお、Haegeman (1992) などで主張されているように、動詞上昇は上位の動詞への付加、動詞句上昇は上位の動詞句への付加操作であると仮定する。⁶

2.1 AP 構文

本節では AP 構文と呼ばれる構文を分析する。AP 構文とは、助動詞 (auxiliary) と述語 (predicate) の結合を含む構文である。ここで助動詞と呼ぶのは *beon*, *weorðan*, および *wesan* であるが、古英語助動詞類の標準的な分析に従って、これらは他の動詞と同じように動詞節点に基底生成され、接辞と一体化するために INFL 位置へ上昇すると仮定する。従ってここでこれらの要素を「助動詞」と呼ぶのは便宜的なものである。AP 構文は、述語の範疇によって AV (auxiliary-verb) 構文と AA (auxiliary-adjective) 構文に下位分類される。AV 構文とは (14) に示すように定形助動詞と動詞要素である過去分詞の結合を含む構文である。

- (14) a. *þæt his gecorenan þegenas beon aclænsade fram eallum*
 that his chosen servants be cleansed from all
 synnum þurh ða ormatan ehtnyssa
 sins through the great persecutions

‘that his chosen servants be cleansed from all sins through
great persecutions’

(ÆCHom I, 6. 1-2)

b. þæt he of wife acenned wære
that he of woman born were
‘that he were born of a woman’

(ÆCHom I, 42. 6-7)

(14 a)には「定形助動詞＋過去分詞」(beon alcensade)という連鎖が、また(14 b)には「過去分詞＋定形助動詞」(acenned wære)という連鎖が含まれている。

ここでAA構文と呼ぶのは、(15)に示すように定形助動詞と形容詞の結合を含んだ構文である。AV構文の場合と同様に、助動詞にはbeon、weorðan、およびwesanaが含まれる。

(15) a. þæt se is healicost
that he is the most exalted
‘that he is the most exalted’

(ÆCHom I, 50. 1)

b. þæt hi heora ðeowum liðe wæron
that they their servants kind were
‘that they were kind to their servants’

(ÆCHom I, 378. 29-30)

(15 a)には「定形助動詞＋形容詞」(is healicost)という連鎖が、(15 b)には「形容詞＋定形助動詞」(liðe wæron)という連鎖が含まれている。

Allen (1975)、van Kemenade (1987)、Koopman (1990)、Lightfoot (1979、1991)らに従い古英語の基底構造はSOV型、すなわちそのVPは主要部後続型であると仮定すれば、AV構文、AA構文の基底構造はそれぞれ(16)、(17)であることになる。

(16) AV 構文
COMP Subj VP AUX

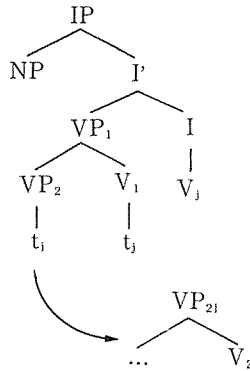
(17) AA 構文

COMP Subj AP AUX

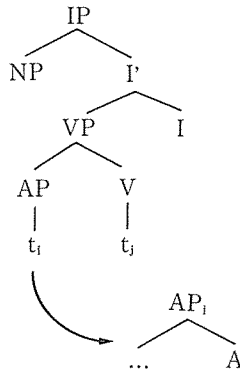
なお以下の議論では V-to-C 移動の生じない従属節に話を限定することにする。

上記の例、(14 b)、(15 b)は基底構造を反映した語順を示している。一方、(14 a)、(15 a)では、それぞれ助動詞と動詞(過去分詞)(句)、助動詞と形容詞(句)の語順が逆転しているため、なんらかの移動操作による派生が必要になる。van Kemenade (1992) のように IP も VP と同様の主要部後続型範疇であるとする分析では、(14 a)、(15 a)の例は(18)、(19)に示すように右方移動によってのみ派生されることになる。

(18)



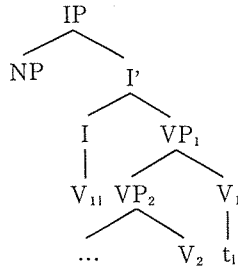
(19)



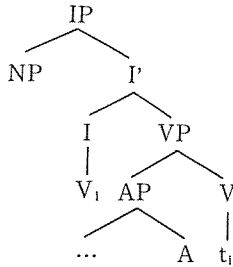
Ohkado (1995) で示されているように古英語では述語範疇である AP、VP も外置を受けることができる。従って、もし古英語に動詞（句）上昇がないとすれば、(18)、(19)で関与している操作は外置であることになる。(18)、(19)では外置によって VP、AP がそれぞれ IP 付加され主要部先行型語順が派生される。

この分析に対して、Kato (1989)、Pintzuk (1991、1993) のように主要部後続型の IP に加えて主要部先行型の IP の生成を認める分析では、問題の例は (18)、(19)に加えて(20)、(21)のように動詞の左方移動によっても派生することが可能である。

(20)



(21)



主要部先行型の IP を認める分析、認めない分析、それぞれにおける主要部先行型の AP 構文の派生方法をまとめたのが(22)、(23)である。

(22) 主要部先行型の IP を認めない分析

a. 主要部先行型 AV 構文：

VP 外置によって派生

b. 主要部先行型 AA 構文：

AP 外置によって派生

(23) 主要部先行型 IP を認める分析

a. 主要部先行型 AV 構文：

V-to-I 移動、または VP 外置によって派生

b. 主要部先行型 AA 構文：

V-to-I 移動、または AP 外置によって派生

主要部先行型の IP を認めるにせよ認めないにせよ重要な点は、動詞（句）上昇を仮定しない分析においては主要部先行型の AV 構文と主要部先行型の AA 構文はいずれも同じ方法で派生されるということである。したがって、動詞（句）上昇を認めない分析においては主要部先行型の AV 構文の生起頻度は主要部先行型の AA 構文の生起頻度と同程度であると予測される。この点に関する調査結果を以下に提示する。

資料として用いたのは Thorp 編の *The Homilies of Anglo-Saxon Church* (1st series) である。V-to-C 移動の可能性を排除するために主節および等位接続された節は排除してある。今回の調査では対象を *þæt* で導かれる節に限定した。調査結果は次の通りである。

(24) AV 構文

AUX-V	97(69.3%)
V-AUX	43(30.7%)
total	140

AA 構文

AUX-A	38(51.4%)
A-AUX	36(48.6%)
total	74

(24)から明らかなように、AA 構文に比べて AV 構文の場合には主要部先行型語順の頻度がかなり高い。このことは AV 構文においては AA 構文で許される派生方法の他に当該の構文を派生する方法があることを示唆している。そのような操作として考えられるのは動詞（句）にのみ適用可能な操作である動詞（句）上昇である。

2.2 MAP 構文

本節では、古英語における動詞（句）上昇の存在を示す第2の証拠としてMAP構文の分析を行う。MAP構文とは法動詞(modal)、助動詞(auxiliary)、述語(predicate)という3要素を含む構文であり、述語の範疇によってMAV構文とMAA構文に下位分類される。MAV構文とは、(25)のように述語として動詞類である過去分詞を含む構文である。AV構文の場合同様、ここで助動詞と呼ぶのは *beon*、*weorðan*、*wesan* のことである。

- (25) þæt Godes sunu sceolde beon acenned of hire
 that God's son should be born of her
 'that God's son should be born of her'

(ÆCHom I, 24. 24-25)

また、ここでMAA構文と呼ぶのは(26)に示すように述語として形容詞を伴う構文である。この場合も助動詞には *beon*、*weorðan*、*wesan* が含まれる。

- (26) þe magon beon gemæne godum and yfelum
 which may be common good and bad
 'which may be common to the good and the evil'

(ÆCHom I, 306. 27)

古英語の基底語順はSOVであるとする分析ではMAV構文、MAA構文の基底構造は(27)、(28)である。

- (27) MAV構文の基底構造
 COMP Subj VP-AUX-Modal

- (28) MAA構文の基底構造
 COMP Subj AP-AUX-Modal

(29)、(30)の例は基底構造(27)、(28)を反映している。

- (29) þæt we . . . ðinum halgum gefeðrlæhte beon moton
 that we your saints associated be may
 'that we may be associated with your saints'

(ÆCHom I, 414. 33-34)

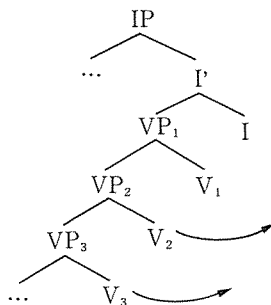
- (30) gif he on Godes dome unscyldig beon wile
 if he at God's doom guiltless be will
 'if he will be guilt less at God's doom'

(ÆCHom I, 8. 15-16)

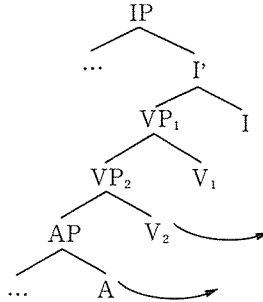
一方(25)、(26)の例は主要部先行型の語順を示している。

動詞（句）上昇を認めない分析では、基底構造(27)、(28)から(25)、(26)のような主要部先行型の MAV 構文、MAA 構文を派生するためには、(31)、(32)のように助動詞を主要部とする動詞句、および助動詞の補部を VP、及び AP 外置によって右方移動させることが必要である。

(31)



(32)



(31)、(32)において、 V_1 は法動詞、 V_2 は助動詞、また(31)において V_3 は過去分詞である。(31)では VP_2 、 VP_3 が、(32)では VP_2 、 AP が IP に付加されることによって主要部先行型語順が派生される。

AV 構文、AA 構文の場合とは違って、MAV 構文、MAA 構文の場合には IP が主要部先行型であったとしても動詞の左方移動によって(26)、(27)のような「法動詞—助動詞—過去分詞」、「法動詞—助動詞—形容詞」という連鎖を生み出すことはできない。

(33) $VP-AUX-Modal \rightarrow Modal_i VP-AUX t_i$

(34) $AP-AUX-Modal \rightarrow Modal_i AP-AUX t_i$

従って、MAP 構文 (MAV 構文、MAA 構文) の場合には、 IP の位置にかかわらず、 VP 、 AP の外置によって派生されることになる。いずれにしても重要なのは、もし動詞(句)上昇が存在せず、したがって MAV 構文、MAA 構文ともにその派生方法が同一の操作によるとすれば(= (31)、(32))、両構文の出現頻度は同程度であるはずである。これに対して、もし動詞(句)上昇という操作が古英語において許されるのであれば、主要要素として動詞類のみを含む MAV 構文の場合「法動詞—助動詞—過去分詞」という主要部先行型の語順を示す例の頻度が高いと考えられる。以下ではこの点に関する調査結果を提出する。

調査は Healey & Venezky (1980) の A Microfiche Concordance to Old

English における beon、weorðan、wesan(とその異形)の項目によった。また今回の調査で対象としたのは次の散文作品（集）である。

- (35) Bede
 GD(C)
 GD(H)
 Or
 CP
 Bo
 Ælfric
 Wulfstan
 ChronR
 BenR
 BenRW
 ThCap
 Lch

V-to-C 移動の可能性を排除するために調査対象は従属節に限定した。調査結果は(36)に示す通りである。

- (36) MAV 構文
 Modal-AUX-VP 型
 232 (70.9%)
 total
 327
 MAA 構文
 Modal-AUX-AP 型
 47 (41.2%)
 total
 114

(36)から明らかかなように MAV 構文の場合 MAA 構文と比べて主要部先行型語順の頻度が著しく高い。この事実は、前者の場合には外置による派生に加え

て動詞(句)上昇による派生も可能であり、そのため出現頻度が高くなったと説明することができる。

以上2節ではAP構文(2.1節)とMAP構文(2.2節)という助動詞と述語の結合を含んだ構文を比較した。いずれの場合も述語として動詞(過去分詞)を含んだ構文の方が述語として形容詞を含んだ構文よりも主要部先行型語順の生起頻度が高く、このことは動詞にのみ適用される特別な規則、すなわち動詞(句)上昇の存在を裏付けるものであることを示した。

3. 結語

本稿では経験的な事実に基づいて古英語に動詞(句)上昇が存在することを示した。しかしながら、動詞上昇と動詞句上昇の両方を仮定する必要があるのか、それとも一方は不要なのかといった問題が残されている。今後の課題としたい。

注

*本稿の執筆にあたって編集委員の先生方から貴重な助言をいただきました。ここにお礼を申し上げます。

- 1 標準的な分析に対して、Zwart (1993) ではオランダ語の基底構造はSVO型であると仮定されている。しかしながらそこでの議論は理論主導型であり、Koster (1975) に始まる標準的分析によって提出された経験的な証拠に基づく議論を論破しているとは言い難い。
- 2 何が動詞(句)上昇を引き起こすかという問題に関しては、Bennis & Hoekstra (1989)、H. Koopman (1995) を参照。
- 3 Kato (1989)、Ohkado (1990)、Pintzuk (1991、1993) では古英語においてSVO型の基底構造の生成が可能であったと主張されている。
- 4 van Kemenade (1987) は3番目の証拠として外置に関する議論を展開しているが、(i)筆者にはその議論が明確ではなく、また(ii)そこでの主張が成立するためには外置された要素の着点が動詞句である必要があるが、この仮定には同意し難

い (cf. Nakagawa (1994), Ohkado (1995)) という 2 つの理由により、その 3 番目の証拠は割愛した。

5 ただし、(11) のような場合でも動詞（句）上昇は生じていると仮定すれば、この問題を回避することは可能である。

6 IP が主要部後続型である場合、動詞（句）上昇が生じた後の構造に V-to-I 移動が適用されると、(i) に示したように動詞（句）移動の効果が帳消しになってしまう。

- (i) a. $[_{IP} \dots [_{VP1} [_{VP2} \dots V_2] V_1] I]$ (動詞上昇) \rightarrow
 $[_{IP} \dots [_{VP1} [_{VP2} \dots t_i] V_1 - V_{2i}] I]$ (V-to-I 移動) \rightarrow
 $[_{IP} \dots [_{VP1} [_{VP2} \dots t_i] t_i' - V_2] V_1 - I]$
- b. $[_{IP} \dots [_{VP1} [_{VP2} \dots V_2] V_1] I]$ (動詞句上昇) \rightarrow
 $[_{IP} \dots [_{VP1} [_{VP1} t_i V_1] [_{VP2} \dots V_2]_i] I]$ (V-to-I 移動) \rightarrow
 $[_{IP} \dots [_{VP1} [_{VP1} t_i t_j] [_{VP2} \dots V_2]_i] V_{1j} - I]$

この問題の技術的解決法については Haegeman (1992) H、Koopman (1995) 参照。

参考文献

- Allen, C. (1975) "Old English Modals," in J. B. Grimshaw, ed., *Papers in the History and Structure of English*, University of Massachusetts, Amherst.
- . (1980) *Topics in Diachronic English Syntax*, Garland, New York.
- Bennis, H. and T. Hoekstra (1989) "Why Kaatje Was Not Heard Sing a Song," in D. Jaspers, W. Klooster, Y. Putseys, and P. Seuren, eds., *Sentential Complementation and the Lexicon: Studies in Honour of Wim de Geest*, Foris, Dordrecht.
- Besten, H. den and J. A. Edmondson (1983) "The Verbal Complex in Continental West Germanic," in W. Abraham, eds., *On the Formal Syntax of the Westgermania. Papers from the "3rd Groningen Talks," January 1981*, John Benjamins, Amsterdam, 155-216.
- Evers, A. (1975) *The Transformational Cycle in Dutch and German*, Doctoral dissertation, University of Utrecht.
- Haegeman, L. (1992) *Theory and Description in Generative Syntax: A Case Study in West Flemish*, Cambridge University Press, Cambridge.

- Haegeman, L. and H. van Riemsdijk (1986) "Verb Projection Raising, Scope and the Typology of Rules Affecting Verbs," *Linguistic Inquiry* 17, 417-466.
- Healey, A. D. and R. L. Venezky (1980) *A Microfiche Concordance to Old English*, The Dictionary of Old English Project, Toronto.
- Kageyama, T. (1992) "AGR in Old English *to-infinitives*," *Lingua* 88, 91-128.
- Kato, K. (1989) "Old English as an SOV/SVO Language : *Be and Passive Verbs*," *Linguistics and Philology* 9, 25-36.
- Kemenade, A. van (1987) *Syntactic Case and Morphological Case in the History of English*, Foris, Dordrecht.
- . (1992) "Structural Factors in the History of English Modals," in M. Rissanen, O. Ihalainen, T. Nevalainen, and L. Taavitsainen, eds., *History of Englishes : New Methods and Interpretations in Historical Linguistics*, Mouton de Gruyter, Berlin, 287-309.
- Koopman, H. (1995) "On Verbs That Fail to Undergo V-Second," *Linguistic Inquiry* 26, 137-163.
- Koopman, W. (1990) *Word Order in Old English, with Special Reference to the Verb Phrase*, Doctoral dissertation, University of Amsterdam.
- . (1991-1993) "The Order of Dative and Accusative Objects in Old English and Scrambling," *Studia Anglica Posnaniensia* 25-27, 109-121.
- Koster, J. (1975) "Dutch as an SOV Language," *Linguistic Analysis* 1, 111-136.
- Lester, A. (1986) *The Modal Verbs of Old English*, Doctoral dissertation, University of Texas.
- Lightfoot, D. W. (1979) *Principles of Diachronic Syntax*, Cambridge University Press, Cambridge.
- . (1991) *How to Set Parameters*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Nakagawa, N. (1994) "Finite Verbs and Nonfinite Verbs in Old English," *Linguistics and Philology* 14, 83-101.
- Ohkado, M. (1990) "Syuyooobu-hobu-baikaihensuu to Zentisi-Zanti no Hattatu ni tuite," *Eibungakkaisi* 35, 203-220.
- . (1995) *On the Structure of Old English*, ms.
- Pintzuk, S. (1991) *Phrase Structures in Competition : Variation and Change in Old English Word Order*, Doctoral dissertation, University of Pennsylvania.

- . (1993) “Verb Seconding in Old English : Verb Movement to Infl,” *The Linguistics Review* 10, 5-35.
- Pintzuk, S. and A. S. Kroch (1985) “Reconciling an Exceptional Feature of Old English Clause Structure,” in J. T. Faarlund, ed., *German Linguistics : Papers from a Symposium at the University of Chicago, April 24, 1985*, Indiana University Linguistic Club, Bloomington, IN., 87-111.
- . (1989) “The Rightward Movement of Complements and Adjuncts in the Old English of *Beowulf*,” *Language Variation & Change* 1, 115-143.
- Rutten, J. (1991) *Infinitival Complements and Auxiliaries*, ,
University of Amsterdam.
- Tanaka, T. (1994) “On the Realization of External Arguments in Infinitives,” *English Linguistics* 11, 76-99.
- Zwart, C. J. (1993) *Dutch Syntax : A Minimalist Approach*, Doctoral dissertation, University of Groningen.

Synopsis

“Auxiliary-Predicate” Combinations and Verb (Projection) Raising
By OHKADO Masayuki

In the standard analysis of West Germanic SOV languages such as Dutch, German (dialect), and West Flemish within the framework of generative grammar it is assumed that these languages involve an operation called Verb (Projection) Raising, by which a series of verbal elements are rearranged so that the surface head-first order is created from the underlying head-last order (cf. Evers (1975), Haegeman (1992), Haegeman & Riemsdijk (1986), and Rutten (1991)).

This paper aims at demonstrating that the process of Verb (Projection) Raising existed in Old English as well, which is an instance of West Germanic language with the SOV underlying structure (cf. Allen (1975), van Kemenade (1987), Koopman (1990), and Lightfoot (1979, 1991)).

Two constructions called the AP construction and the MAP construction are analyzed. The former involves a combination of auxiliary and predicate and consists of two subpatterns depending on the category of the predicate: the AV construction, where the predicate is a verbal element (past participle), and the AA construction, where the predicate is an adjective. Likewise, the MAP construction, which involves a modal, an auxiliary, and a predicate, consists of two subpatterns: the MAV construction, where the predicate is of a verbal category (past participle), and the MAA construction, which involves an adjective as a predicate. In both constructions the head-last order ('P-A,' and 'P-A-M'), which reflects the underlying structure, as well as the head-first order ('A-P,' and 'M-A-P'), which must be derived via movement, is observable. Within the framework where Verb (Projection) Raising is not available, it is expected that the frequency of the head-first A-V construction is more or less the same as that of the head-first A-A construction since they are derived by the same

process. Likewise, in the framework the frequency of the head-first MAV construction and that of the head-first MAA construction are expected to be more or less the same.

The investigation conducted in the present study reveals that, contrary to the expectation, in both cases the frequency of the construction with a verbal category as a predicate is higher than that of the construction with an adjective as a predicate. This discrepancy indicates that an additional operation is available for the AV and the MAV constructions and it is identified with Verb (Projection) Raising.